「藤袴の記憶が求めたフレグランス」

平野佐和　会員

2年前の9月、淡い紅紫色の藤袴(ふじばかま)に目を留めました。名前でしか知らなかった植物を花屋で入手したときは、その視覚的な存在が秋らしく感じたにすぎませんでした。共に過ごすうち、思いがけずその香りを感じた私は、とあるファッションブランドが翌年発売するフレグランスを心待ちにすることになります。藤袴の香りを実際に体感した記憶が求めたそのフレグランスには、他者の記憶の原風景が込められていました。

藤袴

藤袴の香り

2022 年の秋分の頃、秋らしいと感じる花を探して藤袴に出会いました。色も形も一言では表現できないたおやかな複雑さを秘めており、穏やかに過ごしたいその時節の気分にも合っていたようです。ソファ近くの花瓶から少しずつ香りを感じてからはますますこの植物に興味を抱き、外観上の変化と香りを確認するようになっていきます。うっすらと桜餅を思わせる甘さが、ほのかな涼風に漂うような香り方が印象的でした。

花瓶に入れてから数日後、繊細な香り方に干し草のような温もりも加わってきたように感じ、心地良い秋の静かな風との調和を想像しました。乾燥させた状態でも香りを楽しもうと、葉や茎もついたままのドライフラワーとして10月の半ば頃まで枕元に置いていました。その優しい香りのおかげなのか、早く入眠できたようです。後で知ったことですが、10月に「藤袴祭」が京都で開催されるとのこと。腑に落ちました。

藤袴について調べました。キク科で中国原産。奈良時代に渡来し、薬として用い、昔は茎葉の芳香ある半乾品を匂袋や入浴料などにしたそうです。名は花が藤色で、弁の筩(つつ)を袴に見立てたことに由来するとのこと 1)。別名に蘭や蘭草、香草、香水蘭(漢名)などもあり、中村祥二氏によると、古くは香りの良い植物が「蘭」と呼ばれたことに関連する可能性があるようです [2)]。

「フジバカマは秋の七草のひとつであり、香りの良いことで知られている。この香りは日本人が文化として知っておきたい香りである」[2)]と記されています。私はこの植物が屋外で生育している状態を見たことはありませんが、文献によれば、関東以西の川岸や土手などに以前よく群生していた多年草ではあるが、今は観賞用に栽培されているとのこと。その姿も香りも広く好まれたからかもしれません。

「花は8月下旬～10月頃にかけて、小ぶりの先が筒状の花から、白く細い2本の花柱(雌しべ)が飛び出してくる」[3)]と記されています。その楚々とした外観にも優雅な香り方にも、古くから人が言葉で伝えたくなる魅力があったのでしょうか。万葉集や古今和歌集の中に藤袴が詠まれた歌が存在したと知り、あらためて私もこの植物の記憶を大切にしたいと感じていました。

ブランド「マメ クロゴウチ」初のフレグランス

ファッションブランドの「マメ クロゴウチ（Mame Kurogouchi）」が初のフレグランスを藤袴の天然香料を用いて製作中と知ったのは、2023 年春のことでした。同年10月５日の発売日に南青山の店舗に出向き、直接ボトルから香りを試した上で入手を決めました。独特なオーラの中に、あの藤袴の記憶を彷彿とさせる香りが感受できた嬉しさと、自身が体験してきた香水には感じたことのない静かな奥ゆかしさへの好奇心があったからです。

ライケン×マメ クロゴウチ オードパルファム
LICHEN×Mame Kurogouchi EAU DE PARFUM

店舗でのディスプレイ
Mame Kurogouchi Aoyama（旗艦店）

デザイナーの黒河内真衣子氏によるウィメンズウェアブランド「マメ クロゴウチ」は、デザイナー自身の経験や記憶に、伝統と自然、職人技術と最新のテクノロジーを複雑に織り交ぜて作り上げられるコレクションを展開しています。香りの制作に際し、黒河内氏は記憶の深部に注目。生まれ故郷長野の雪景色を室内から眺める感覚、「目は冷たいのに身体は暖かい」[6]にたどり着いたといいます。

香りの設計者は、「ライケン(LICHEN)」の調香を手掛けるアーティストの和泉侃氏です。「ライケン」は、「マメクロゴウチ店舗の空間設計も手掛けたデザイナーの柳原照弘により 2022 年に発表された「空間を可視化するフレグランスブランド」。〈LICHEN BASE EAU DE PARFUM〉のオークモス主体の土のエレメントをベースにして、淡路島の貴重な藤袴を使用、白檀、沈香、スミレ等が配合されたとのことです [7]。

海を超えて藤袴の蜜を求め飛来する黒蝶(アサギマダラ)を見るために、淡路島の神社の神主さんが育てている藤袴の香りが、和泉氏の提案から用いられました。黒河内氏によれば、初めて和泉氏と面会した際、彼は黒河内氏を黒蝶にたとえたそうです。彼女の記憶の光景をブランドの香りで再現するために、藤袴が選ばれたのでした。香りのボトル素材に選ばれた墨黒の陶磁器からも黒蝶が想起させられます [7]。

香りの設計に際し、黒河内氏が和泉氏の住む淡路島を、和泉氏が黒河内氏の記憶の原風景となった長野(雪景色、善光寺等)を実際に訪れた感触を伝え合いながら発想が生まれる過程から、一人の記憶の光景が他者の記憶と出会い、新たな物語が紡がれた背景を感じます。藤袴の優雅な香りがナチュラルに感じられるのは、土のエレメントとともに、沈香や白檀という、時を超えて人が愛した香りの余韻との調和ゆえかもしれません。

沈香と藤袴

白檀とともに香木として古くから有名な沈香。その名の由来は「水に沈む木」といわれています。生木のままで香りを放つことはないアキラリア属などの常緑香木の樹皮が傷つくと、ある種のバクテリアの作用により樹内の

一部が樹脂化して、水より重く沈むようになるというのです。この樹脂部分を含む材を加熱することにより、高貴で幽玄な香りが醸し出されるとされ、沈香の中でも最高級のものが伽羅と呼ばれます。

調香師の平野奈緒美氏の著書のなかに、時の権力者により銘(名前)が与えられた銘香木の説明があります。高砂香料コレクションの「一木四銘」は水戸徳川家由来で、1 本の最高級の伽羅の所有をめぐる権力者三家での争いから 4 分割されたものです。その 1 つが宮中へ献上、残りを三家で分けて収められたそうですが、各々につけられた銘は、後水尾天皇勅命「藤袴」、肥後細川家「白菊」、加賀前田家「初音」、仙台伊達家「柴船」でした [10)]。

1本の香木でも、部位により香りが銘のごとく異なるのでしょうか。高砂香料で 2002 年に実施されたという、これら 4 つの聞香による香気評価の結果を引用します。「アンバー、スパイシー、ウッディなど共通した香りがみられる一方で、藤袴と初音はハニー様の甘さとバニラ様の樹脂様の重い甘さが特徴となっている。白菊と柴船はサワー感、カンファー(樟脳)など比較的軽い香気も感じられた。」[10)]

沈香は香水素材の一つとして「Oud(ウード)」と呼ばれます。その一部を文献より日本語で紹介します。「このウッディノートの主な特徴はあなたを旅に連れ出すことです。世界地図上だけでなく、時間においても」[11)]私自身も、この繊細で複雑な香りには、人間が持ち得る遠い記憶の奥深くへと導かれるような気がします。

パーソナルな記憶が導く一期一会

「マメ クロゴウチ」の香水素材に用いられた藤袴は環境省のレッドリスト、「準絶滅危惧種」に指定された植物です。そのような素材から抽出された精油はまさに貴重な香料といえましょう。2022 年に藤袴の香りと過ごした私のパーソナルな記憶があったからこそ、このチャレンジングなフレグランスに翌年の秋に出会えたと思うと感慨深いです。この香りから、デザイナーの記憶の風景と創作への思いも知ることができました。

大切にしたいフレグランスとの一期一会は、人により、それぞれが特別なものであるはずです。今日世界中に溢れるほどの選択肢がある中で、人が心惹かれる香りに出会うということは、その人自身の個人的な記憶が、嗅覚を通じて嬉しい刺激を受け、新たな再編集を始めることに繋がるのではないでしょうか。それぞれが全くパーソナルなものです。これからも、五感を研ぎ澄ませながら、未知の香りへと探検を続けたいと思います。

参考文献

1) 塚本洋太郎 監修『原色茶花大事典』淡交社 1988 年
2)中村祥ニ『秋の七草 2 種・藤袴と葛の香り』国際香りと文化の会 HP 版 VENUS・2015 年秋号
3) 廣瀬清一『フジバカマ』国際香りと文化の会 HP 版 VENUS・2023 年冬号
4) Mame Kurogouchi HP https://www.mamekurogouchi.com
5)LICHEN HP https://lichen-lichen.fr
6) GINZAMAG『〈Mame Kurogouchi〉初の香水ができるまで　記憶のカケラを凝縮、長野の雪景色を表現』2023 年 10 月 8 日 https://ginzamag.com/categories/beauty/419743
7) FASHIONSNAP『「マメ クロゴウチ」初のフレグランスが誕生　LICHEN とのコラボで実現』https://www.fashionsnap.com/article/2023-10-02/mamekurogouchi-fragrance/
8) WWDJAPAN『「マメ クロゴウチ」が 10 月 5 日に初の“香り“ を発売　故郷の長野の冬景色から着想』2023 年 10 月 2 日 https://www.wwdjapan.com/articles/1659123
9) 山田英夫『香木のきほん図鑑　種類と特徴がひと目でわかる』世界文化社 2019 年
10) 平野奈緒美『香りのチカラ　調香師が知っているにおいと人の深いつながり』笠間書院 2023 年
11) Jacques Cavallier-Belletrud『Louis Vuitton Atlas des parfums』Thames & Hudson Ltd. 2024 年